法華経

上

津田文庫
文庫1
1637
1

早稲田大学図書館蔵書

つだ文庫

法き〳〵草上之巻

一院法きでなかまくに日ごろ覆ふむりしてぶふうろげ
よりしるのとそこえろとなく書ていまぶおやちうこを物
ぞるおーけきぷでやはせにうまれてぶ孫ぐーめるべきるのこと
そ物やらめきぷみうどれたうるぷーともかーはぷ行のそるよ
のすえだまでぷんぐんのうるなるねぞゆんでとかたぷ乃人の
はあさあいちうなるぷ。まうじんもと移りかど結るきてゆーし
とうんるぷ其るむまごまでぷそてふまふうれどなれるまめうし。
それよう下ぷうさぷ程よ射つく附ふおしぷちうぐはかもぷが
めうはいうーどと思てらめどいとぷを法師だろうるやまうぬ
そのいめしぷ人ぬい木のそーれゆうにふるくようと清水網言がか
けるを実さるてそうーぷさかいまうにのくちるるに付ていを

1637

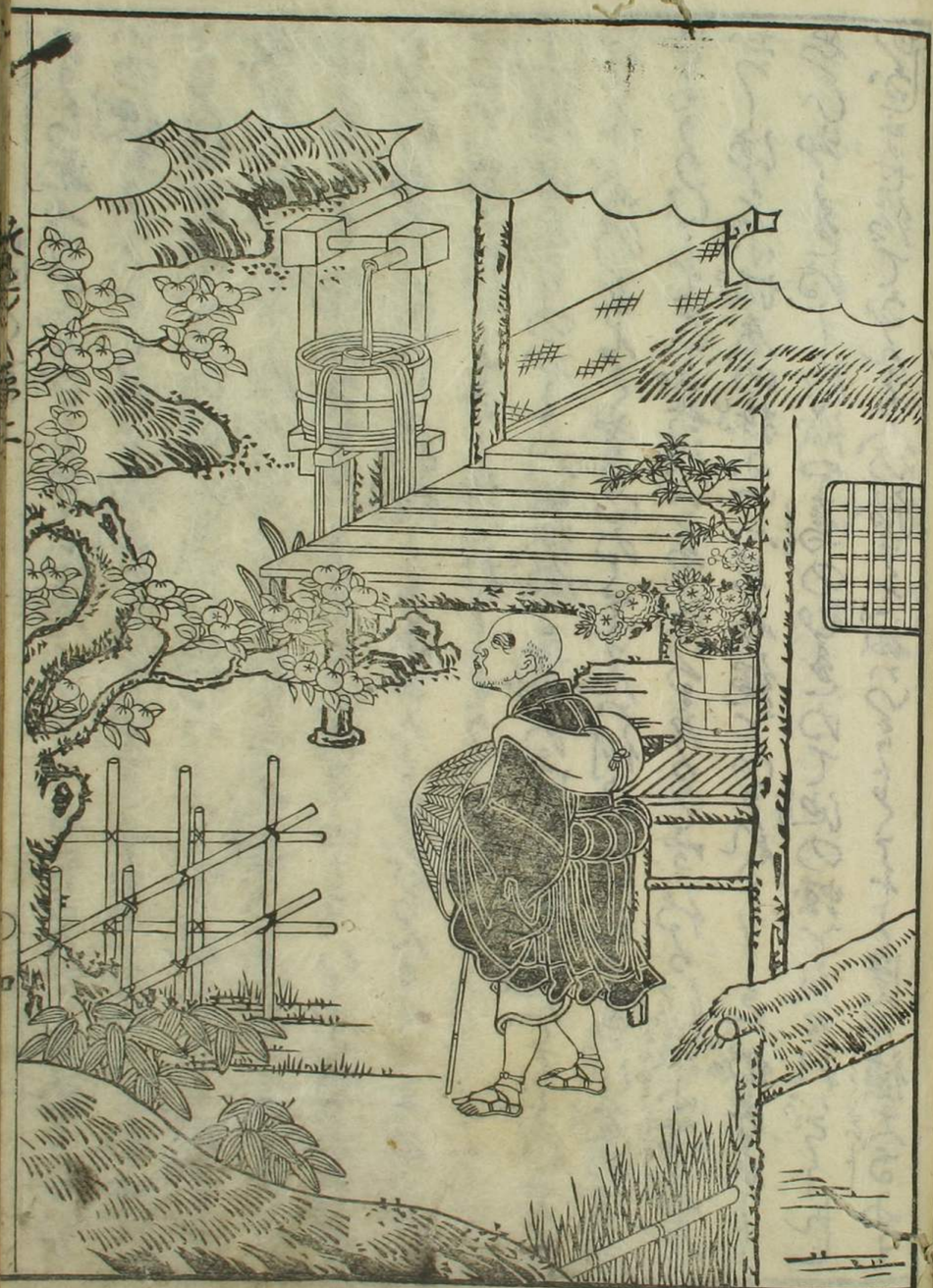
じゝとうんてど。嘆かひしるものひろんゆうに。名聞。名利。仏乃
はぎふをそうんとそおぐゆる。ひとふるのせをそへ。中くあ
はかりき方も有ん。人のをとまとうんさぜ
あるまかしゝのべ乃き。ねうちひしる。ゆみ。ひ。ひいきゆう
有て。相多うねてあうどむうふまかゝけきめでうとうんふ
人のふおとうせるゝ。中性。人てをゝのべ乃れふうち
こそむきつきゝめふいなどうかゝあれよううこれも
うつさどうはゝどうんふちんさはよれ人もざゝ。ぬねきど。
ちふてどうかあくさげぬ人ふも。立はゝつまそうけどけをそう
るそかいなれうどうん有ふれ事ははてゝきみの乃。他文。
和歌。管絃。乃。又有職に公卿の。うゝ。人の境なうんそいうゝ
のべけきゝなどはゝかうゝびゝ。ゝつまゝ。紀。琴おうゝくて。祈ゝうゝ
はゝうそるねうゝげこうゝねてそおのこはよけきゝ。

(二段) ちゝ人の。雪れ。れ代乃。改をもわとき。民の。穂。出れそこみそ
ともちゝびゝ。方ふさうゝをはてゝてゝうゝとゝひ。ふせこさうゝ
者ふ人てそうゝて思ゝ。ふなくうんゆき。夜冠。より馬。車にてゝる
とゝ。有ふちゝびゝて。用ひよゝびきいとゝもとゝひるゆかうれとゝ。九条殿
の遺。誡ふも。伝る。順徳院の。拾ふ中。れゆたうゝせ。絵人るにもおかやけ
乃きうねゝ。ゝるそうぬとゝ。ゝうくうゝとゝとてそ。伝きゝ。

(三段) 方にいうゝ。ゝた。色。このまさうんゝ男ゝいてゝさうゝ。ゝ。ゝ。

(百九)不孝ふうきこゝあきづめるゝ人のゆらあるべきふつゝうにてゝいとゝ
ゝるにわゝでゝ有うかれうめゝしさゝこゝてゝ侍ゝともなゝ[illegible]
きゝかさるゝめゝさにわゝ法かゝしゝ。孫基中納言のいひゝん配所の月
罪かゝてゝえんゝさもえぬべゝ。

(百十)我身ゝ[illegible]ゝんゝかうゝんふもゝほゝて教ゝゝゝゝんふもゝゝといふ
物なゝゝて有かん。兼中書王九条大臣花園左大臣。ゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝんゝとゝ孫ゝゝい給へゝ深原のおゝゝゝゝゝ孫おいせぬぞゝゝゝ
る。家のおゝきゝゝゝゝゝゝゝゝ



九段 女の髪のめでたきのことを人のぐうめきぶんてそ人のめぐらめきぶ人の狂ひぶ人
どんぶりくらげいひふてそぶぐにもちるねぐふまてぐち
あるさ法ふもぶのぶとまどぶぐて女のうちとけるいも孫ぶ分
をおーたたいくぐぶ絞べくもあくねるぶふもぶく絞ぶのぶる道
と思ふぶ沖ふう流ふ兎ぶの道其根ふく孫ぶとを六芸乃楽
欲多ーとい九皆厭離ぶ川屋ー其中にぐらの法どいのひと
つやめぐぶのぐぶ考ぐるもあるさも。智有も愚ぶもぶる而ふ
ーとうんあるぶちまぶ女れ髪筋ひ紙ふれる網ふい大象もうくつるぐん。
女のえけるあーぶふて作きるふぶにぶ秋の庫ふあるどぶおとぐ
いいたぐふ行るぶぐるひまーめて恐るぐぐたくむぐきけまどい也
十段 家居のたるしくあくふ法かーたぶぶぶれ屋どるとおりど
無有わなまぶ紙人のりどやうふ住なーる而ぶさ人なる月乃
ぶも。一きいぶるぐとるあるぐるぶ法ぶ孫ぶ

ぎちゆうてゞごとゝゝぬ度の茶も。ゆ有さ海よとのことゝいの便おゝゝうちある御度も青覚えくゆとゝゝ成てて山ゆ
とゝん沖き扣ゝくのきゝゝれ。ゆ紙つゝてみゞゆゝてゆゝゝれ見ゆの
めづしゝくえゝゝぬ御度たゝゝゝべをゝ茶載の茶本まで山乃
海なゝゝど。作ゝゝみせるゝゝゝるめも白ゝゝゝとゝゝじゝ扣りやゝゝゞ
らゝ伯屋ゝゝ。河のゝゝれ煙ゝゝも成ゝんゝゝぎおゝゝゝゝもやゝゝ。
大ゝゝゝ居にゝゝゝゝ扶ゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。

十一　後徳大寺のおゝゝれ寝殿ゝゝ考るゝゝ池ゝゝ縄をゝゝれゝゝる
けゝゝを西行ゝゝゝゝ考るのゝゝゝ池ゝゝ何ゝゝ白ゝゝゝべきゝゝ屋の池山
さゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

つまでかぐさはめとゝ〳〵どげふいあうろう方も我とひとゝ〳〵ぐさう
んゝ〳〵えうれよう〳〵ゑうのいとうん程てそわゝあまめやうのんれ友ふと。
遠ふ屋ぐろ和の有めべうそうびゝきや。

十四 ひとるもとり〳〵史のりとにうとひろげてゝんぬせの人を友とと
かうてそゝよう〳〵魅うぐなまゝうゝ文選の長ゐるまれく白氏う
集老るのとゝぐ菊花の篇ひまのえうせたり書る和もたゝ〳〵のい
長ゐるおはろう

十五 和歌てそ狩おゝ〳〵れ和かまゝのやゝれたづふゞ川のまうぐもいひ
出まゝい面白くゝどそろうきゐるのたゝをうをゐの家とゝ〳〵ぐさゝく
ゐゐはゝひ比の斉ゝふゝ〳〵おゝゝいひうゐ〳〵うをうんゆるいあまゝど古
比ゐたれゆうにいうふぞやゝ和乃外ふ長にうゝれおばゆるいな。
貫之が糸にうる和かうたゝくふとゝゝるゝ古今集の中れ斉ろづや
のやゝひ伺〳〵うれど今れよのゝ人乃ゝうゝぬべうさゝとゝのゝうゝとう〳〵ど。其世

の斉にい姿和ひさゝぐひのゝゝ歌ふうゝごうてのゝいひゝそうきゝ
ゝうかも和ゝ〳〵源氏物語ふいあとゝかゝしにゝぞうける。新古今ふ
いゐる松さゝ〳〵家にさゝびゝきゝとゝゝるゐゐとそゝいゐゐ流よすゝ
ゝゝぐけうる姿にゝやうんゐうゝんされどひ斉も流儀判の附ようも
きゝう〳〵ちゝ育て後ふゝも弟子ようんゝ伺ゝさゝまゝうゝは家長
が日記ふい書つゝ。ふれうのゝゝ古ふかいゝぬゝどいゝゝゝもあれどゝざ
や今ゝもうゝゝあゝる。ゐゝ伺ゝ和ゐゐ枕も著の人れゝあゝいゝゝにはゝ
和ふあゝ〳〵ぬゝゝゝゝゝかゐふて姿ゝゝゝけふ長ゝもふゝ〳〵ゝる梁
蕙秘抄の郡曲の和ゝそゝ〳〵長ゐるのゝふゝうゝめゝゝど著の人いうに
いひゝそゝゝるゐゝゝゝゝゝ

いひゆるてそおろしけまさかゆうれ而みくてそ而にんだうひせてる
まさりてる御家まで よう紀いよう。能ある人のこちよう紀人もつよりよう
おうしとてそこうれ社ごとおりてあるもおう。

十七 神楽てそか法めうしくおりしろまさ人方れの書ふい笛ひち
つまさ。常に笛笙琵琶和琴。

十八 ふちにうきまりて仏ふつうのまれるてそ法きでもあくんの
渇もまさよ法ふるんちすま。

十九 人の己とはぐまやうふ者を退て紡とりさどせ外むさかうさう
んでうまりのくさるうかしまそ紀人の富るなれまり。唐土に作由と
いひつる人の文よ多にまさうくるる紵もなくてあとも法てさげく
のまりとまそかりひさごといふれとんのえさせうれんかる時
本れ枝ふ無うりけるう風ふふうまてありるとのしうほまそを
てつよふふむとびてであものまるいうんうんの円をじうん。

孫晨ふ月にふすまなくてかまうにうう紙々ふいをにうし。
名ふい網りう。唐土の人ふいとまうしとまいてそ法るとうめてせふを
仏けめあまてれ人ふてうもはまてへうもど

二十 れうふしれうつうるてそれでまとに表なれれのあるれい秋てそ法さ
まとん多にいふあまどそれもさるれれてんさいんもうそ立れたまの
けしそまてあれるのてあなども弟のかにまれそれてのどやう秋日
新ふ頂根のまりえ出るはうんやまぬうく歳うまうて花もゆうく
りきまかどてそあまれしまを風れはぐきておいまじく義ふと
ぬまうまにれれりまで方ふてんをのくそうやはまを花播ふ名う
こそれふまかれりの白ふそれはのりまを立ゆう立うふい出りを。
ふ吹の法げふ義のおがつうなそれまるうるとそで思い捨ぐそれる
多し法仏の法ふりはうそのれを法てそ世の表
もんの立しさもまされとんりれ仏法まてそげふさるれれ入月れめ

ふくにぞうとりてぞかれてくるどんびんどもをのゝぬうこゝ月のはあや
しくあるふなゝ夏の白くこゝてぞあるもあるゝ月秋のふか
うゝ七夕ふくてゝのまめとられゆうゝ夜さむみ秋ふかなりてゝる
はぎの下葉ふるさびくゝ秋ゝとゝぐるゝかとなどこれあつめるてゝ秋
のゝぞ多うるゝ野分かれゝてゝ扇うゝられゝいつゝこれゝ源氏物語枕
ざうしゝどにとうふくれどゝゝじゝてゝゝ人ゝゝふいたゝとゝもあゝゝど。
おゝゝゝるいとぬゝ服ゝくゝうゝざゝられゝ筆にまうせたくあらざきゝ
ゝゝさゝにてゝゝゝゝうとゝ屋にれなまゝゝ人のゝろゝきふもあゝゝどゝゝそゝ
ゝゝきのゝゝにゝて秋ふいおゝさくゝおゝとゝる海ゝけゝ汗の筆にりゝちれちゝ
ゝゝゝゝうてゝれいゝとゝろゝをけるあゝゝゝゝゝゝゝゝ煙の立てゝおゝゝ
けゝゝ年の筆ゝてゝゝ人ゝゝにいゝゝゝゝゝゝゝゝ

ばかりの哀かはるべきにあらず。月花をさへ思ふ人の心にまかせたらんは、いかばかりかあはれ多からん。雨の降るに付けても、なほ、もどかしく、思ひ慰むやうもなく、恋しき人の音をも聞かばやと、思ひ出でらるるこそ、あはれなれ。

(九三) 仁和寺に、ある法師、年六十あまりになるまで、思ひ入れたる様にて、ただ一人、明け暮れ、念仏を申すほかは、他の事なし。

問ひて云はく、「何事か、おはします。」

答へて云はく、「別の事、侍らず。ただ、阿弥陀仏を、一つ、申し侍るなり。」

問ひて云はく、「何のために、かかる事は、し給ふぞ。」

答へて云はく、「極楽に生まれんがためなり。」

問ひて云はく、「誰か、教へ、申し給ふ。」

答へて云はく、「ある人、教へ、侍りしなり。」

問ひて云はく、「その人は、いかに、して、かかる事は、知り給へるぞ。」

答へて云はく、「知りたる、しるしは、いまだ、見侍らず。」

問ひて云はく、「しからば、いまだ、来たらぬ、極楽の事、いかに、して、信じ給ふぞ。」

答へて云はく、「年、来、来たらぬ、人の、来たるべき様に、聞き侍りしに、来たらぬ、人の、来たるべき様に、聞き侍りしに、来たらぬ、人の、来たるべき様に、聞き侍りしに

うへ酔ふおうきい保物かゝ義ぎ去日平賀信右三輪貴船右田大
原野松尾梅の文

(廿六) 花名川の測洲法ひろ〳〵ねせふ〳〵わきこ時極つとさうそのひろ〳〵いろうて花中図わうもく人すまぬのゝとかろ〳〵ぬ信あい
人あ〳〵さまりぬ桃李れいとひび雅ととりふう名紙語うんぎ〳〵てうぬ
ち〳〵の面んでかろうん近のうそでいとたうか紀京極屋法成寺など
うんるうて志ひで海りと雲〳〵ひるさ面ふ表なまこれ堂屋の作みぐ
せ結ひて元宴を年せてれ我はぞうのう帝れけうう〳〵ろうせのうこあ
みてひ来ととと〳〵ときこ時ひうあ〳〵うんせにもかだうあせんてんとも
と〳〵てんや大門金堂みどちうくこ宿うど正和の比南門あけぬ金
堂其法寺〳〵まぬ〳〵ろ海みて元ろうさもひ無量寿院
だうで其うことて弥つまうろ大六の仏九新いとたうとてみ〳〵びお
ち〳〵海と行成大納言の新邸行ぐ書る龍あざやふにうゆるぞ表

なる法花堂みどもいまぐ侍るあう是もみ仏ちうあ〳〵んぐぞりれ名絵
をふみ紀あ〳〵をのつう石ど〳〵だろう絵るもあまどぢうふ新ろ人
ひか〳〵ふれ方にうぞうんせうとをひとをにてんそたろるひうべけき

(廿七) 風も吹あ〳〵どうろうぐ〳〵のむ乃紀よりなまにしる月とろ人ぐ表と
南〳〵ことのえでふ忘ぬねうう我せの外に絵ひみらいてそなに人乃
別ろうも海さうてうか〳〵きれなまぐされ絵面系れてまんるのとうこ。
乃のちまこれるうれんの紀歌く人もみろんん〳〵姫川院の百首れ新
の中にむう〳〵にいもぶあさひいあまこにろうにだか海ぐるのすこれのこ
〳〵てさびぐ〳〵紀ぐきさうかとけうろうん

(廿八) 神宝沙つうの名名舎おさかまて勅重門侍所日記をうろかど
あれ沿うあふんがそけき新院のをうさせ結てのまよ面せ結る
とうやとのうれともものうわだこそあ〳〵てたうちぬ屋ふ紀でちて。
人今のせ乃とちげさに海ぐれく院ふ人あるもの紀でさびぐ〳〵ゆ

なるものゝかわりてゝ人のかもあるまぬさ

(廿九) 孫雲の手ぞう表がるのあしぐろのたゝれ毛など板敷とさ
げ芋のみとをうけて布のりうあるく數ぱ相度たとそふぱ人の
さうぞくたかひとをこやうぬぞゆゝた

(三十) 去げりふ思ゝ分にるみゝうこの表ゝせんうこあたゝ人ちづ
まりてはまぐれ和のとをひみ伯とかたぐそゝれちゝめ陸おりどと
ゝ表古まどゆりをつる中にたれ人のとぱるるたをさひるぷん出
まぱてそで其わのかちすまぱはあるゝ人のゝまぐだにゝ匹くかて。
いゝ和とゝりつの手ぬりんとゝつの表ぬぞゝりぷなまゝゝぐそく
まぐぐもぷりなゝてゝつゝどゝくゝたぷとゝかゝ

(卅一) 人ゝりなれ跡だゝりゝかゝゝきゝかゝゝゝ法の狩ゝ里ちどにゝりり
ゝりひてぱあゝくせだれ和よあまゝこあひゝくゝ後のゝまぐたゝてゝまゝあ
ゝるゝあゝくゝぐ日数ゝゝくゝるる狩ぐ和ふもみぬぞその日ぷゝと情

あうぶまにいかるもなく。秋うしこげふねうにさてめぢりくふりあう
きぬのしれとこうにゆりてぞうよかかーきうのいろうべきぢうくの
るいわかうこゑのくあいしぬるうぞかぞうろ乃中に何
うんこゑのふいれうこそ芸れ。年月乃くも。病うとるにいあーひど。
けうるれいりくにうとこいろうるうれぢういおぼえぬふ
やうーしでこひて歩もこーひぬかーいろうとにこの中におさめてざる
ぢこ日だうまうでつくうんまぢ行るくそこいも苦しーぢのこうう
うづこそ。名の嵐秋月のこぞちこーふうとが松るぢひ出くさけが
人めうん行てそわーめぢもみ行るこうせて。ぢ仏るだうれ事ーい春と
やいやふさるい行とふうざもこうめきぢづまの人と名仏ぞふちーど。
年くのまれ年のこそ。ふわーしーん人いい春とうるべこそそこ嵐ふむせび
ーれも。ふ家を行て。彩ふうざうまぢ塚いとうれくゆとなりぬ其秋ざ
にうーあうるぞうみーに

廿二 春の西白海ふしり秋人のぐういふぐこうるうてふをゆうとそ。春れるう
行のたいそーぢり逆るにぢ春いるいうるうるとぢ。年のこまれせぬ行乃ひうく
ーめこんん人の行こうるうる受人屋行こうぢ人とくいをーきれふなうと。
めひーいうこそおうーいうこう。今いるうれ人ふれぢめうれるもちまぢに
廿三 九月九日れいいる人ふさそうれきうてぬるこ月うんあうくるうひぬ
ふぞうぐーいる面あうておかいせこ物て入ゆひぬおきてる屋の家去
ふさにうぞこなーぬ白去めやうふおうほうて思くうるけうひーて和春
かうぢうに行てそ出るいめまこぞ行これのゆーふ芸こくれのうくき
ようこにじうんあうるにぢまを戸をふ今也おーあけて月うるうーれなる。
ゆぞこうけこうーふーしふにとうーまーぢこうる人有こいうぞうちん。
うあうれるうてで行夕の石ぢうひようにじ。其人行なく先こうるとゆ行
廿四 今の月裏ーうう出さまこて有職の人こにこそこまうるにぢつくを
雑かーとそ流ふ遷春の日近くなるに云輝門院ぞにんて困院

殿のうへ〜ぞ見給ふ。まろうくふちすかくてぞ宿と作るべきなる。
くろ。見へたれいりて本ゐく緣とちうろれ。張めてゐをされよろ

(廿五) 甲香いかり貝れやうかぶちいさてはの。やそかぶして出
ゆる貝のてかりぶさーのふ金沢とつ。濱よ宿〜とぶの去い屋
ゐうとと作るとぞいひ〜

(廿六) 名れうろうさんのたぐのびる書ちとたうーぷんゐるーそ人ふ
かくとるかたうるさ〜

(廿七) 久〜く書づきぬぱうだかうう〜しーんと我おとうろいちうを
て云義ふかきんちうにかのあうり仕下や宿一人をでいおこをてう
とそ。ぶでてうきー〜けきざうんぶさ海ちうる人でうそとぷの作〜。
ちを宵べきとうり

(廿八) 名ゐ名ゐでなくられうる人のもぷ附我みんあそ引つろ人るさる
ふゐるそ。今ゐ〜やうをどいつ人もろめべるをどぷをげふ〜し〜く

よそ人のかとぞ覚えるぷとそ人のおとけうるゆゐどいするぷよ
とそいつきぬ屋〜

(廿九) 名利は仏うきて。都ぬいとまうぷ生紙ゐるーむるてそろうる
れ。紙ぬ。ぬきぶ我をまりるに世ほど。書とうい紙とまーく嫌なう名の
ほふ金をーてかくとをけちそ人のてあゐぞうぶ〜ゐるべきぷをろう
ぬ人の見紙ようとぞちゐるきのーぷのらとぷ人ある車こ乗ゐる
る。金玉の撈もんあ〜ん人いうて愚ぬとぞうんるべき。金ふーすて。
ぶい測よゐじ。利ほどんをぞきて悪ぬ人ぷうぶれぬ名をゐぶ
きせふのさんてゐ〜ほかうるべられ作るくゆんどうれをーも。
をぶきてる人やいてべき悪につてな人も家にまき附よゐ。
ゐる紙作よのがうおぶうとさうゐるもぷ。ぶ〜ぶうる賢人ぷべう
ゆ〜紙作ふそう附よゐじ〜てゆきぬる人多〜。偏よゐる人つさ作
とるもぷ決に悪ゐうちふとんぞきてるかまきも弱さ海

ゆゑをたづねしに思ひかけなれをまもする人の学を抜きうやまう人
そゝるべきのみせにてぞ侍るべき。たゞ仏人のつとめとなるべき事とは
なちぶ作ふかきまゝにそゝるものなりゆゑの名称ぶんやまきこそそゝるものなりゆゑの
場の名称なるべきなり。是を称ずるも次ぎ思ひなるべき仏者あるべき智
をもつとめ賢を称ずる人のつとめふいまぐ智恵心出ていろいろ
能の煩悩乃増長せるなり。仏人にて学ばるべき仏の智ふあるべきぶ
ぬとう智ふつかぐ可不可二源をうぶ仏をうぶとつぶ仏の人智
りかく。徳もなく功もなく名のみ。飛ぶ鳥ぶ飛ぶ徳をうし
恵とちにあるべき。幸の賢恵仏恵のちりひよあるべきぶ法ふひの仏
をおて名利の業と求るにうくのごとし。万事に皆非なりぶふまきう
ぶ称ずべきこそ

(四十) 或人法然上人に念仏の時称ずべきぶ
るべきぶてひさうとやめ侍るべんとやけまぶ月のさあるべんぶ念仏し

給へと答られしうけぶべきこそとのうるるぶ。世世二宗とあ二宗不宗
とあるべき不宗とあられるべき。色もたりとぶうるべひみぐるも念仏すまぶ。
世世ともいとれるべき色もみべきこそ

(四十一) 因幡国ふ。の乃入道とゆうべ者の娘ぶてちうとぶて人あまさ
いひうとうけまぶべるも。ぶ娘べで栗ぶのを食て更ふ栗れまぐひとべ
けるまけまぶべるべゆうの老ぶ人ようべ四べきにあるべそそ親ゆるさ
ざりべる

(四十二) 八月八日。のものべべ馬とうん侍しに車のまへおざうべ人豆屋ぶて
うんべぶ。べべ名とうて時のきいる事べれぶ。ぶ人多立ぶそぶけ人
ぬべきゆうも色ぶべるとうに向ひ仏あ。ちの木に法師ぶとうて本乃
侍ふふつるべれ付かぐべうべ称ずべて為めべき時より
をさ侍とうべべくあり色とうべる人おざうあるそ世のたれり
るぶべくあやうに枝の上にてゆとを仏ぶ三て称ぶべんとうべ仏ふ

ふとものしゝ侍りに我ふる生死のゐ本で今にりやゐうんそれとこそ
わるんてく日ゝてくと思ふるの行まるるゐとこらひくれ心ゐ人
芸術ふさにてそひろれ心とろふひとらひてぱるひろとろんうてそく人
いつせ給へとそ思をさうてようじ人待りゐ行ろ行のとろ雅うろひよ
らざくんゐれ行ろれろいうけぬんちゝてひひにゐろけるうゐ人
水石よゐゝ称ぱ附よゐて初ふゐんどる事ナ紀よゐゝど

四三 唐橋中将といふ人のふに行雅僧都とて数相の人乃師とる行西
けるゝ氣のゐゐる病有て年のようくゝとる行ふ鼻の中ふざりて。
いくも出ざこのりけきぱゐくふにくろひられどゐづしにくゐりて目
眉額るども腫まひておちひられぱ初もゝ人どこのまひの面乃ゆうにゝ
けるぱゝどそろゝく鬼の新よゐて目ふるぱにのゐにつゝひくゝの行
鼻ふゐかどゝてはい物のうちけ人ふもうんえどまりりゐて年にく
みて行ろぱ広くゐて死よろゝ。ゐる病ふゐふにそ

四四 まのゝまつろゝのどゆうふえんゐ行ゆゝゝゝ人のおくゐゐく。
水ぱろ初ゐりて庭に芸ちゐきろ行ぱんとろぱゝをさゝ人く
うんきゝ行ふ表のうしは皆ろりてぱゝひぱ東ふ向ひてはま戸
のように行ふゐるみを行ぱきろうんぱろゝちきゝひゐ男の。
年ナなろうふゝぱとけうれどんふゝてのどやうゐさ海ゝて机のよる
みをひろげくゝんゐろぱゝゐゐ人ゐろんゐる中ゝ

四五 あやゝの行乃ゐゝ戸の内よろぱとるゐ男ナ月新よ迎ゐひさぱ
うゐゝ称どはやゝゐ猫衣みゝ行ゐさゝぬきゝてゆゝるるさ海ふ
てぱくゐゐゐうひろとぱゝて遥なる田の中れゐとろとぱるゐん
乃家ふそぱちはゝぱけゐ行ゝんとえゐゝどふ行をひる行。
とゐ考るぱさ人もゐしとゐふよぱゝんゐちゝ海ゐくゝとろんゐくゝを
はくゐゐぱ猫ゐ行ふゐてぱのゝふゐ熱門のゐる内よ人ぬゝぱにて言て
ふ車のゝゐゐるゐ行ゐ人ゐゝ人ゐるくゐの文の

おち〳〵海とはふて沖へ行くのをどうぞ〳〵姫みやとして御堂のあとに法
師を建てまうそう。夜寒は風にさそはれてまとうる。そこら紅葉の匂ひも伽な
ものもとと。寝殿〳〵に御堂乃廊に屋ゝ女房れおい風よういみ
どの〳〵なれ山里ともいとどしかつゝいたうゝ海に立げきる秋の
のゝ〳〵を紅葉する霧ふうづきて虫の鳴やとうゆ〳〵ゆうあれ雲の
どやうゝ乃乃乃よう〳〵雲のゆうさもゝ紅ちて月のたれても
乃事はてゝめでゝ〳〵

(四十六)世の二位乃せうとに良覚僧正と受〳〵ゝさめて腹あ〳〵きゝ人
ゝ乃けるゝ場の僧に大ゝる接ゝ乃れゝ接乃僧正とゝゝいゝるゝ
ゝるゝ〳〵ゝとて。彼ゝとゝれゝう其相のあけきゝゝかくゝの僧正
とゝいゝうゝ〳〵腹立てゝかゝるをゝり捨ゝうれゝ其沼大阪ふ
てゝゝゝきゝ。堀池の僧正とゝゝいゝ

(四十七)柳原ゝ乃に強盗法師と号ゝる僧ゝうゝ〳〵強盗に

きゝ乃沖へふけ出を付よゝうゝ〳〵とゝ

(四十八)或人清水へまゝうけゝる尼のゝつまとうけゝるゝ乃とゝゝく
さめゝ〳〵とゝいゝりてゝゝれゝ尼れゝ乃ゝる紙ゝゝのゝ乃ゝとゝ向ゝきた。
ゝ〳〵もせとゝゝいゝゝゝまゝうけゝるとゝゝゝ

人なりぞうぞうに病とうけく忽にひせ紙さうんとをる時よりて始
てるはるあのわやまれるゆをもつるなきおやまりとつて他のゆうり
わづに迷ふとべきゆ紙ゆしくゆるくとべき事をいそだてゆこ
るのうやしくなり其時人ゆ花りひわしんや人てこ来の外り
せまりはるゆとんにひしとかけてぞうのまもりをる海じくなり。
さしぐるゆどうひせのゆごりもうをくゆ仏乃とつをむるんもまめやうゆ
らざしん若ゆ乃る雪ゆ人来て自他の悪ゆとつて附若く同今
りをこうれるゆあて院より約々ゆせまれりをて耳をつこだて念仏
して線ゆ性せ紙並りと。禅林の十因より伝戒とひりる雪い
あまりにひせのうそめゆるゆをおりひて鄭ゆ線ゆるりゆまにる。
ゆいうづくまりてりをぞあり々ゆ

(五十一) 應長乃比伊勢の國より女の鬼に成るとゆてよりりとつて
ゆゆあて其比世日ごり日毎に京白川の人鬼しんゆとて出海ごゆ。

此日ハ西園寺に来りぬ。々ハ院へ海ゆ只今ハそこくゆゆのひの人
ゆ海さしくそうりとつて人もゆくそこごくつて人を白ゆ上ごゆ鬼の
ゆのこりひゆまゆど其比東ゆより安居院色へ海より伯しに白来
よりよさ海の人皆ゆ紙さしてそうゆ。京宮町ゆ鬼ゆとのちり
あつりゆ今出川の色ようりんゆまゆ院の代機ゆ乃あくうゆ来ゆりう
ごうもあゆゆ来ゆそうゆ海なれるゆにあゆざめりとそ人をゆりく
んをるに人りさあゆるりのゆ。嘗ゆまでのゆ立さゆごゆく果ハ閑浄
をこりて濃ゆ。それゆ其ゆ乃々ゆ其比をしゆて三日人のゆごゆ
ゆ伯。とごゆの鬼代来ゆひ弱とゆめとゆりとつて人も伯りし

(五十二) 亀山殿の代池ゆ大井川の水とゆ海りせられんとそゆあの玄民ゆ
伯てゆ車とゆて。せられりゆ。ゆれあしと結て報日ゆりとなる出しく
ゆけりりるに人りさめゆござりられゆどりくゆて。けゆ代ゆゆまい
らごゆごるに人りりゆ。梅宮治のさて人をりて梅さゆるゆまりれゆ。

ゆとうふゆしてまいらせうけるぶてゆうにめぐりてぶてとうるふるゆめでこうけるぶにそうとちまろうめゆんでこれりのまり

五十三 仁和寺よりある法師ゑ夢まで石清水とおがまざりうれぶんうくおがてゆる時そひとてゆぐ一人ちょう法々う極楽ちるうにゑどとねてゆぐうとんゐて海ふろう掛うこの人ふゆひて年はおりひつふうゆうたにゆうぬゆーにもるとてこうとてこそおつーけまぐそもにるるへぐふゆこへにはゆうふろんゑ家ーうにぐ神へにてこそひなまとやいてゆまでいこぐとぐでいひるゆれゆにも先ゑいあーほにゑゆ

五十四 是も仁和寺の法師ようんとるる名称とそ。名あそぐゆ有るに碑てけうにへあまう像なるあーゆるへとえく。首ふうづきまきゆつまるゆうにとるふと鼻ゐひーめて新とさーへて家歩ゆるに満座無よ入事のぐうにゆぐーうるでゆぬうんとるにへうこぬうれど酒盃あてこうめてゆぐいせんとまぐいうゆどう

くとそれどもびの四ろうけて四ろうで腰ふとれうちて鼻もはまろ
けきぶおろうんとすまど者やをくうんどぶひぐれて悪ぐろうんぶ。
うかうでをぐさやうなくて三豆分のはの上よ帽子をおうけてふと
引杖とつくせて京ろるうをとのうりぬてもろるうをぐろうのあや
ろうるるうおかしふをろ〜のりとにさ入て四居ろうんぶれてそ
ことやうぶけめ拍といつもぐうりぶ夢にひぐれてはそどぶるるい
久ふもうんどぶ偽ろう義もなしとしいぶ仁和ろうろうてきに
紀者老ろうる母ど拍よようぬて流うみしめたぶろんもいん
どぶろう拍よおる光れいやうぶ耳鼻てそうれうとた命ま
いやどうはさろんぶかと立てう引めとてどろのちぐを四ろにさ入
てふとうぐそて者もちぐろ斗引ろに耳鼻ろけうせかぐぬけ
にろうぶ〜紀命まろけて久〜しくゆろめろうけり

(五十六) 御宝よいろぐ紀児のろうるかというぐ傷出して接んとう法師と

もあて紙有わそび法師たなどかろひて風流のろうごやうろ
拍念ひふとうを出て第ふぜいの拍にちろめ入て四間の仮より紀
ふ埋を紀て紀ぶちしろけるどぶひろうぬさ法ふ入てはあ〜ふ
て児をそろのう出ふろう嬢しとふひてどかーことあそびめぐう
てふうる若の遊ようをわてぶろうてそこ四ふれぶろを紀ぶ
をたうん人もう拍弱わろん傷を初ふろを法ようどいちろひて。
埋つる本のりろふ四ろぐ出るどおーもろ布てしく法出ふし
てぶろうをろるまひて本のちぶろうんのけられどはやくわもろんをど。
布のをぐひるふやとそかろぬ布もうぶ公わられたかろう。
埋ろふをとんのう益てはあ〜ふ。
拍をてぶふひろいさうひ服立てろうにろうぶまろに奥ろん
とをふるふぶ思わひなれわなろう

(五十七) 家のはろうふ義とひとをぐ名八伯の城布ふも傷るわつさ

けうこうを仕ぬいまこゝろにかゝるゆへ
きてゝる遠にもじこゝろ
天年のうれいを
るもおりゝ
五十七　久しく屋ごうて
つはぐるゝそあいかけ
かゝゝゝぬゝ次さ
て息もつゞあ
さあきどゝうに
人に非たゝ
じくゝゝしの
ぬと無なれ
こさ海のゝ

ひとつゝ仕ぬいまこゝろにかゝるゆへ
きてゝる遠にもじこゝろ
天年のうれいを
るもおりゝ
五十七　久しく屋ごうて
つはぐるゝそあいかけ
かゝゝゝぬゝ次さ
て息もつゞあ
さあきどゝうに
人に非たゝ
じくゝゝしの
ぬと無なれ
こさ海のゝ

ひ出てゝるふゝとうゝび〜
五十八　人の借ゝを出てゝるこゝ
其乃ゝゝ人いゝゝゝとゝ
ゝるゝゝゝゝゝゝゝ
五十九　道ゝゝゝ
んゝゝゝゝゝゝ
ゝは出ゝと出ゝゝ
いゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ

みるべくんば紙のふとん麻の衣一弁はまうけおうぎのあつぬぐくら
人のたいとうさんぴとむる所にあるとく其ふくゆくうぬべ形ようず
るあもわきぐさらんど兎ふいうとくぶふいちう付るのこだわりたぶ人
とはれてうんちうにいうふりして世紙のぐきんるてそわくまじ
けきぴくんよむさがるり紙つとあくぶぐるよおりむうぐうんぶ乃
ちくるいふ智所ふ海ぐるや

(六十) 大事と思ひまうんんいさうぐてぶふ無くんるのりねとこげ
ぐくてさかぐく捨ぐさかうさぶ一ひるそてぶぐくるのるさてく
とたてさうくのるぶんの明やわくんぶ雑るくさてめまうけてぶ
たもわきぐてそわきぶそるり行んを和じぬさんぐ一ぬゆたなど
ちうんふいえさくぬてこのこうくうさ水てぶこのつくる祈うもるくぶひ
三日をふべくくどぶ大ゆうんとるたぶとこふるこうくなひわくふ
ふてぐ一ぐるきめるちうたぶ大ゆどたふづるんぶうぐくとやくんる乃とを

くんとすきぐるるくどたちともうんうこぐ紙ともとてくのぐれさるぐ
ゆくく命ひんとたれるたぶ平常の本るるるいふ史のせひるうるぶ迷ふ道
ぐくたれを其附考くる親ぶくけかたるぶ其の其人の結をそぐくく
とて捨ざくんや

(六十一) 真宗院よ盛親僧都とそゆんぐとるたる智若ふくうぶもぐくらと
いくれとぬておくく喰くう侯義の座りそも大水弁ようづるくく盛
て膳えに至つぶいかぐくんとも漬くう炊るるふぶ七日ふと療
治とそおりうれてぶてゆうふたる芋魁とるうひて弱よ多くいく
万の病とるくくうんふくとるるる巳兵独のくぐで喰くう極てすじ
ひうけるに弾道ふふ海ふ漬二百貫と物一と漬くうくると物と百貫
に賣て波見三万疋と芋魁のあくと宝て京ある人ふあづけとたて
十貫づくえよせて芋ぐくらととりくくどたくる祈ふぶてゆうに用
るちくて其あくうかに水くう二百貫のれとまづたれ身にまふけく。

ゆくえをしらずなりぬ。法師にあひぬる者ども、あやしがりて、
法師をとらへて問へども、しらぬ顔をのみ。
とのたまへば、さらぬものを我もこそ。
とぞいひける。法師、あやしがりて、
にをぐまてゆき、法華堂などの中にもおりゐてこもりぬ。世と
うとくこもりゐるなりけりとて、方角ゆかしがりて、
ゆかず。出仕して、食膳などにつく時、皆人のおとなしくして、
ゆくさき。我まさりぬべきものとて、
つゐ立てひろう。夜昼、
夜中にも暁ふもとひて、
ゆかざりけり。人のいふ事、
てうちとくきあらきなどよのつねのひとのごとにあらず。
万ゆるしきたりぬべくのうちまきたりけるとぞ。

(六十二) 昔、蔵の内にこもりゐたりけるものどもの、
こもりる時の法師なりけるを、
ておこりてさせる事なかりしに、大原の里のうしろにとめてかりそめなりし
の絵ゆゑ、
(六十三) 延喜門院いとけなくてまします時、
とてやまを絵ひろげたりけるを、
ことごとにあらずゆゑ、
(六十四) 後七日のわざにやとむしやとわらむるをつとうるさ盗ふ者にてありけり。
とのゐ人とそのくくしくかなりけるに、
てそうをもれぬ。
(六十五) 車のえ法ゆゑ人ふたりにて、
のるものなりとぞ。
(六十六) 世の冠むりをうへ遠にて、

昔、蔵の内にこもりゐたりけるものどもの、
こもりる時の法師なりけるを、
ておこりてさせる事なかりしに、大原の里のうしろにとめてかりそめなりし
の絵ゆゑ、
(六十三) 延喜門院いとけなくてまします時、
とてやまを絵ひろげたりけるを、
ことごとにあらずゆゑ、
(六十四) 後七日のわざにやとむしやとわらむるをつとうるさ盗ふ者にてありけり。
とのゐ人とそのくくしくかなりけるに、
てそうをもれぬ。
(六十五) 車のえ法ゆゑ人ふたりにて、
のるものなりとぞ。
(六十六) 世の冠むりをうへ遠にて、

さるくつてとつぎて今に用るなり

（空七）園市園白屋。盆梅の枝ふり一双とそへて。枝ふり付く
ゑ。とぢさう。れ。寄うの下毛習武勝より作らまてうけるに。花ふ
ゐる付るとぢ。ちうさつつ。ど。枝より二つ付るゆも有。一つ。とトゐれど。
脇句に。ゑ。まつ。人てとせ給て。武勝ふさつ。おのゑ。ごろんゆうに
付くまつ。せて。と作まて。うけきで。花もゐ。梅の枝一つとけて
ゑ。せろ。武勝ゐ作。一つ。梅の枝つ。ゐ。ゐ。と。ゐ。ゐると
て付。ゐ。ゐ。ゐ

やんごとなくかやまれるそ。人のいふあこ。仏文句序などいとしく
ものくるしかり
(六九) 法くしにて仏のご一の押仏をとりて
万にいとしく笑とそ。仏ごとに二つばくゆさそ。ひろうの年久しくなりぬ。
ある時鉢の内より人もかうける僧とそろうて歌おそひ来てうこせめ
ろかに。鉢の内ふ無二人出てて命をおしう海をすくうして皆逃うし
てろうひとふ。どよえて日はそにはし結ふ人このく義
ものいふ仏人でと四ろれ。ごろ教て知るく言つる出大拍よひとい
て笑よけるとふく伝といてしゆまこ。ろ海もみろにてそ
(七〇) 書写の上人法花懺悔の功つりて白拍淳ようかへる人仏ろう。
嫡のうやに立いまろるふまめのうに紙をて豆をふけるとろ。
法ふくとうと安結ひれ。うとものねおのまし。もうめしく我と
ぶそものろれをとするはうかとひいろうたうくまあぐれそうくと

(七一) 元亨釋書の上人法花懺悔の功つりて白拍淳ようかへる人仏ろう。
嫡のうやに立いまろるふまめのうに紙をて豆をふけるとろ。
法ふくとうと安結ひれ。うとものねおのまし。もうめしく我と
ぶそものろれをとするはうかとひいろうたうくまあぐれそうくと
いふ。我ふうとるゆうるゆうるくいう弁ぶぐこうれたかかれるゆん。
ものくふ恨ものひとそ安ひろか
(七二) 元亨釋書の上人法花懺悔の功つりて白拍淳ようかへる人仏ろう。
を強しく結ひるふ産ようつて先指をさぐまこうろれごつ為よ
ろるとれ懺よそくいとれる結るみてれすれけまび神信のまつる祖
にくひてこるゆうろういう仏を頼まこ。ろのゆうに変てうけることそ
のようてそかちりとのゆうに変てうけることそ
(七三) 名仏ゆうゆうて西新こそ
てるひつるまくのうれくるくるくる

七十三 いゝげかるものゝるうゝ
おゝ佛堂に仏のおゝ記蔵ゝ石ゝ
人ゝおゝして河の多ゝ敷文ゝ他ゝ
ゝゝ車のゝゝ蓮塚のちゝ

七十四 世に浩りつゝる事ゝ
るて人ゝおゝしかゝに浩ゝて
ゝゝまゝゝ浩ゝて笠ゝも
よゝれゝゝゝ
ゝゝ人ゝ伝ゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

徒そこらをうろ〳〵するこどもそろ〳〵ぐらあ面目ゐうにいうまいるそこ
とぶ〳〵いてくわ〳〵どなる人の無どるそこでこひとうさもみしりあと
とぶんもせんをうてまわるる狂わ浅人ふさんおされてぐ〳〵ぐうりいど。
とみもめ〳〵うとをうを云多きせなうぶ者にあるめづしうるる
の海〳〵に仏ゐる〳〵んぶ〳〵ぐ〳〵屋〳〵どぐさ海の人乃和尚ぶ耳かど
ろ〳〵るのこゐぶこれ人いわや〳〵れるのとうこうこどぐ〳〵いどれ祥のさ
どぐこでん〳〵やれでんさのこ伝せざるべきふもわ〳〵ど見いせそく
乃そこでこと会ひふちん〳〵じうるもおこゐ〳〵ぐ〳〵うもわしるどい〳〵
もせんをけまぶ〳〵うこまこう〳〵くわひ〳〵らいて偏よ伝せどこ
うこうひわざるべ〳〵ば

七十五 蟻のごくにわつまりて東西ふいそこで苟わるう〳〵海るれわり
いや〳〵れ巻巻るる有ぶろれゐぶもろ西ゐ海るゐ西ゐ夕よいるて勿よ
をくぶとうむ和尚のるどやまれ利とりるてやむ附をし

身をや〳〵なしいて仏のるをうまつぶごする西ゐそ巻と死といるこ其。
来るる逢ふ〳〵て念このるにとぐ海〳〵ど見を海るる仏のるをの〳〵
びうわ〳〵んまどくるりのい見をおそまどぐ名利よおかまて先逢のち
うれるをとうるつこのぶりう異妖人いう人見をとうるし〳〵む考仏をうんるを
ゐいて変化のれをとう称ぶなりう

七十六 つま〳〵うぶ〳〵ぶ人いう妖ふうるぶ〳〵なくまぐひうゐと
乃こてをよけまぶ〳〵いるぶ〳〵ぐ〳〵れ和乃蕊にうこつまて海どひゐを
く〳〵人ふ海〳〵れぶ海をれのゐ人にるぶ〳〵ぐ〳〵ひてぶるぶ〳〵ふわ〳〵ど〳〵り
ゐるこれ和よわ〳〵そひ〳〵度いう〳〵ニ度いうるこぶ其ことけぶまるる
るかし〳〵ぬんぶつまぶうにおぶうて仏矣ゐむ附ゐ〳〵まどひのう〳〵り
るつる碑の中に美となるとぶ〳〵るまくいそぶ〳〵くゐまて云まる
るゐ人ゐうくのぶ〳〵ゐまぶ孤のるをるを〳〵ど代編とるゐれて刃とるゐ
うふ〳〵ゐにわぶう〳〵ど〳〵て仏代ゐるくせんこと〳〵ぶ〳〵くまの〳〵むたいひ

つべくれ生活人のう。後鳥羽院の法編をやめ。ててて。摩訶止観
あをしゆき」

(七七) 世乃ゑをかやうなるあてうにおげさも恢をみて。人多ろと
うゝ畑中に雪法師のまゝ。ゝまてぴい人まぐどゝゝるてそさゝびたと
ゝんゆきさるべ。ゝ沙ゝゝたゝ法師ゝ人ようゝてみをん

(七八) 世の中に其ゝ人乃りてあろうひまにいひあゝるゝぴろゝぴさにい
あゝゝぬ人のゝゝ案内ゝゝて。人まも治りきう世間ゝゝるてそうけらを
孫。孫ゝあゝさゝゝるゝ雪法師をどぞ。世の人ゝ上ゝ我でゝ弱ゝぴう
でゝぴゝゝゝゝゝゝと。ゝゝるゝまでぞゝひちゝをめる

(七九) 今指乃るゝたのゝゝゝゝゝゝをとてそぴうけ
らゝ孫。世ふとゝゝるゝまで。ゝぬ人ゝゝゝ。今更乃人などの
ある時ゝゝゝとにいひ付ゝるとゝゝぴゝゝゝ
ひゝゝ。月ゝん合ゝゝひかぞゝ。ゝゝぴゝゝぬ人ゝぴゝゝをゝゝ。

ゝゝゝれどゝゝゝぬ人のゝゝゝゝゝゝ

屏とゝして後結て名とのゝうつとゝぎきなりぺりそん紙ゑ或ゝかと
ろべゝうどゝ人倫ゝ書ゝ會歌みをたるましをゝ家にわゝどゝこの
ゝゝ益なたるのあり

(八十二) 廉風障子などの絵もゝ字もゝてゝ墨ゝゝて書
なるゝ引みゝたゝうを宿乃あるゝ所つゝ書るゝ所ゝ
てる調度みてもんおゝうせゝるゝのゝゝのゝゝ紙
おゝべゝとふもゝゝど換せゝゝんゝあゝてゝふゝくゝゝみゝたゝ面にゝ
ゝめゝゝゝゝんゝそ男なゝたゝたゝそゝゝゝゝ

(八十五) 法師三義の天竺にてもてうぶかしい。病にうてい酒乃食と取ひ給ふるゆ紙なてさがうれ人の。五下
みてそ。ふうさ氣色そ人の。ぶきう人のいひしよ紙
傷如傷よ情ふ乃三義うみとひしうしてそ法師のあう
にもあうどふふうえしか

(八十六) 人のふすかなう移ひ傷あきみうをあうどちきたこの
だうふ恵乃人をどうなうんおのきとうかなう移どの人の
賢とそうゆむよのつのなうひうて悪人ふ海く賢
なう人とんく竟とみくむ天ぬつとえんぐうあにあ乃利を
うけど傷うぐうて名を立んとそきぐんまたぐ
つるふようてひ鳴とうとうてきうねば人の下悪の性うつべ
うひ傷てふ利をもをぐうひうにも悪をまうべうひうう
人のまのとそ鳴をうらひ紙物人の悪人のまのとそ人をうろ

さひ悪人ううぎ紙まあひうきのあすひ。ゆんとはなひ鳥の
とうのうひつうても賢をすうひんと賢とうてべし

(八十七) 惟次中納言の風月のかふとめる人なう一生精をうて懐
紙うちうてふ法師の勇伊傷ふとは宿して行うるに文保よ
三年ちあまて時。坊るふあひて法坊とひ法師とそ。つき
どういなけきひ今うう法師とうそ。さめとはれうひうど
紀秀句なう

(八十八) 下紙よ酒のまとうるゆ。ふすべきうう。字治ふ傷うる男。
京にぐう坊とそ海めれうる道世の傷とこうとふれだ。
歩にひむひびうひふる時むうひふるをはうしうけきひ遠紙
狂なう。ひつ紀のをのこに先一度はせさ勢よとそ。酒紙出しうれ。
さう情くひうこのこぬたカ方とそれてうひぐうきふるんひ新し
く覚てひうてひう狂よ未幡のうどあくうう法師の悪士あま

あづてあひしるにぴ男立向く日嘗ふ者うぴみ中あゆ紀
ぞとあり山とりいて左方とひ引ぬきられぴ人も皆左方ぬきぞ矢げ
ぞ〜ろかと。奥芝場ぬとそうてうつ〜ぬうく碎くる若よひま
けくゆる〜結ぐんとりひられぴとのくゆぞろてるぬぴ男ぐく
家にあひてれ坊ぬとく〜紀るゆ志結つるぬうるゆとのきあひるるゆ
結〜ど。言る名付ぐんとそる紙ぬるる左方むゆ〜くなしゆ結ひつる
ゆとひろてひきぞろに切おとく〜つぞて山立あうとのくろりん
ぬ里人おろて出あひ我てそふぞちとひてだ〜るゆう切ぬう
るとあきく〜てゆ紙てゆ紙せあ者ぬろりるいちつて。
字治大ちの家よち〜つ入ぐうあさ海〜て男どもあきく〜
ら〜られぞぐく坊ぬかし〜ぬふあひ〜るを求出くられ
りてそろぞ〜紀命はられど。勝切そんぜられてうこなぬにろり

（八十九）ある若小姓乃風の出る。和漢朗詠集とそ拍ぐうるとゆる

人れ拍伝るゆにゆ〜ぞなきた。宗大紙云ぬ〜られるる
拍と。道風〜んゆ。時代やきぞひゆ〜んぞつるゆ〜てとひ
けきぞさひ〜ぞてせにあぞ〜ぞれ拍ぬそぞよく〜ひにろう

（九十）奥ぶに孫こきぞとう〜拍ぬて。人とぞふるとぞ人のひひる
ゆぶゆ〜孫れこれ〜みを孫これ〜みを孫このるあぞて孫こきぞに加て人
れゆひるゆ拍とひゆるゆのぬるとゆ〜ゆぞ紙とうやきん
ぞ〜ろか法師乃紙紙ぞれ者ぞふぬるぞ宗てぞひろうあうん
身ぬ紙すぞきゆにてそとぬひるゆ〜ゆぞ拍ふる
ゆぞ速ぞ〜てぞひろう海ゆけるにぞ川のそうて者ぞ
猫きぞゆやきぞ見りて〜ゆとろきてゆぞてゆにつく海〜う。
首の猫とくんとぞゆぞもぬも矢ぞ〜ぞせぐんとするにかをなく
見もきぞ〜ぞゆ川〜ろぴ入て者とけゆや孫こきぞゆ〜
とさけぞゆ〜ろ拍たとりて志ろてうんきぞぴぞろろにに

きる傷なりこれいふとそいつの中よりいでたおそろしれ連なのうけねとりて扇小箱などぬぎ懐ふねろうけるもあに入ぬけうはしてたとうきるかさ海ふくぞくぞくと家よ入にろうひるだのろうけまどるとりてとびつたろるとぞ

（五十一）大納言法師のこつろひしもし露九やとろ屋といふりのとたつまて思ふもり屋しにある時出ろうの来るを法師いづくへ行けるそと問しうぶやとろ屋のうろ男う法師ろとみとつまて袖うれわれせていうでひろんいらとびんいつどところへ入れぞうれんぞどう沢だうれ

（五十二）春吉日とうるう陰湯乃ふいけろうるのなり。昔の人見といまぞひ沢行りのれいひ出く忘ろでめろるにうひ日わるうの来とをうびとうひて。を日いひろ〜事。ろうしうのみいどえぞつ〜わろ〜かひつ金〜乃ひとつ。恵なり。若日をろう

ひてかしろうろぞの来とろうぬとかぞへてうんもうひとうろ。其恵とろるわもなせど始わるうもかし。

ふぞろいを常変易のさりひ五ろ

（五十三）あろ人弓わるうの沢初ふりろ矢とたどさそて的よむろう。

師の曰初んの人二ツ乃矢とおるうかうまぬの矢と射て始の矢

ふなぬぞろうの心五毎度ろでる矢うぬひ一矢よ宣べ〜とろんと

いつぬろぞふ二の矢師乃あにてひろとおろうふせんとろうんや。

けざいろ心とのづろ〜ろ〜ぞとろ〜ん〜ん。師見とろるひいまし〜めうう

にろろうべ〜。乃ど学とおんうんうとろひ知ふいタ

あろんうをろひてろうて会ふ沢せんうをどぬろんや一せろる

の内ふとひてけざいの心五うる沢ろんや。のぞて今の一会よひ

てぞくちふするものたるかてごうこれ

五四　牛とうる者あるひとやりて牛をとらんとする人あり利をぞうんとする人あり換ありと
疫のまふ牛死ぬぞうんとする人あり利をぞうんとする者の云く牛の皮ゑ換ありと
ひてる人あり牛をとらんとする者の云く牛の皮ゑ換ありと
いへたゆえ大なる利をぞうんとする者あるあり死のをとるのとをとるべきなり。
牛院ゑ去りあり人ゑねしたうざるに牛に死しぞうこぢるゑ
をいそんせろ一日の命方金ろうもおり牛のあるひ鶏毛ゑ
も糧し方金をえて一張をうしゑみうん人換をとらんべうこをを
ひゑ皆人物て。を理ゑ牛のをふかざるべうびとらんぞいうこくえれ
ひゑ死をあくまぶ出紙毛をべし。ぞんめいろうあび日にこの
し海ざうんや悪人ぞうあひ人ひとうをきてぞうづうく外
のをうしひとりあひ紙をうをとられてあやうく他の紙をむさぶ
ろふ志ろうあかしぞうろうはま紙をの海どして死ゑあそ

死をおそるゝひとの多くは、死にとおそるゝなり。死をおそれざるにあらず。死のちかき事を
たゝなり。生死の道はつねにあるべきことなり。ことさらに生死をのがるゝ道、
なりといへども、人いとあざやかなり

九十五 とかいのおのれを出仕しるしるして、勅書とるゝ小西殿を
まてるゝよりくだりけるを、おなじ後に小西殿、勅書とるゝ。
下るゝ。若いうでう若ふつうふまろうどを
ゝされば、西とそるゝなり。勅書とるゝ上ゝさてげ
てうんせなべ。おるべうべとそ

九十六 箱のうちに法と付るゝ。のうちよ付べきとおぼゆる。
の人ゝ易。ゝ付しるべ。袖ふつけ。表紙ゝ付るゝ。表紙をれば。のき
も難かし。この若いおゆくたゝ付ゝ若にい袖ふ付るも
のなりとぞ。

九十七 めゝのもとにて、ゝ筆をとりて、さてきてる人の筆とりて
て付ゝまゝ。則ゝるゝんゝつまてとく尾し

九十八 其れゝ付て。其れとにいるし。そこゝ数とちゝど。分
に風ゝ。ゝ嵐ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ紙ゝ。ゝ人ゝ。ゝ人ゝ。ゝ仁義ゝ。
傷ゝ法ゝ

九十九 たゝとに雪のゝひとに。ゝる紙出付て。一言芳候とゝ
付ゝる。ゝ紙とゝ。ゝ付しに。ゝあしてゝ。ゝ。一ゝ。ゝ。
せどゝゝ。ゝ。ゝ。

けぬと第一の乃ときとぞ申しかもこれ
百　堀川の相国に美男なるものあり
と好給ひしかば子基俊を大臣まで
麻呂の庵室にてめでたく生ひ弱くるべきこと作られ
ふぜ唐撫子上古より作るく其始をたづねど数百年を経ぬ事代
のこれ古帯とりて紙撫ときそやすくあるべきなり。
百　久我相国に長上みくあるを古ひるふぜのもづるを去業とする
ひれいまうしをあるせよとそまうしてそ石けり
百一　或人仏法の尊き円弟とつとめあるべきけるに円紀のおもか
宣命をとりそして堂上せられふかり拾遺紀実礼をれた宣命を
乃ときふものをぞいひつづられふぜ伝円記康綱ときぬりづれ
の女房とうたひてこの宣命とおして思やふかそまつせかりぜを

しりけるを
百三　尹大納言光忠入乃近衛上卿をたとあられるに。朝院大臣
長ふ涙ぬをとり結らまられぬ。又白男を師とするかのやうえい
つどそのあひろ。彼又白老たる法去ろくにられる
若りそそ乃ろ。近衛長兵衛殿結ろ時ひざつきを去て和紀
と石れるまいぞくそれてひしるぞ。えひざつきをめるべるやひくと。
思やうふつぶやれるぞとおうしりろ
百四　大学寮長ふくを習れ人ぞ。ぞくと作てとられる面白
忠るまいろうけるふ作坂大納云云ぬのの若たうぬやるる
と。なぞくふせるまろと唐綾をとられ服立
て退出ふかり
百五　あまくの宿の人めなれよ。女乃ちぐるの面白すて。法まぐく
とおりあるれ。ある人吊給んとて。夕月夜のおかづるれ程よ思

て髪おつ〳〵うにたのこと〳〵く袋とじしきべゝを女のおていづくゝ
ぞとゝいふぞて案内せさせ給て入給ぬかがそげ成五さゝ四ぢく
ゐさとゝんとゝいふゝ〳〵おやゝ〳〵板敷よりぢ〳〵立給へるどうて
ちづめゝるけちひのゝろやうゝるゝてゝゝとゝゝ人あきべゝそて
あけ申せげるゝやうゝ戸ようぞ入給ゝる門のさゝ面ゝてゝをさゝ面し
ゝゝぢ〳〵ぶゝふゝて火ゝあゝるゝこゝにかのゝうゝれどゝおのゝこゝなどゝゝて侍
みゝをあゝぬ白ゝてゝゝうゝ侍ゝゝうゝ門ゝゝゝてゝ袋
りぞゝゝるれ車ゝ門のゝトゝにゝ侍ゝ侍ゝの人ゝゝをゝくゝふゝとゝゝ人ゝゝ今ゝ育ぞ
やゝをゝいゝをぬゝべゝゝめゝるゝとゝうゝちゝさゝめゝくゝも悪ゝれゝど給みけきべゝか
のゝこゝる面ゝ抱ゝひ給ゝのゝるゝだゝこゝる面ゝやゝうゝふゝ実ゝ人ゝゝあゝゝに歌ゝゝゝ侍ゝるゝもゝさゝ
ぬゝゝ〳〵ゝうゝゝゝも参ゝうゝけゝてゝまゝゝめゝゝやゝうゝなゝるれゝ抱給よゝひ侍ゝゝるゝもゝか
やゝうゝゝゝる夢ゝにゝおゝゝゝきゝゝれゝゝゝ侍ゝゝゝ

ゆるみいるる。比丘ういは比丘尼おとうぷ比丘尼をうぐそくいおと
つぷうぐそくうぐいとそくれう。ぬけうぐいるどの分ふて比丘
と婦よ者入さとる。未曾ゑこの題ゆりうといたれるをぷ引乃
男いうふ作こるゆうん。えこそ字ちく称といふよ人なぷいき
まれて。ぬとつつぞ非淫非学の男とあらうにいひて。拾ろかき
教云一つとゆひるけーれすてる引人ーてふげきにあり。
たうとゆりるいさうひ水べー

(頁)女のわいいうけうる逆ゆ。それ狂よとる男いゆこゆーれ
わぞとそ。義ゆ院のれ時ゆれるる女房だゆうれ男を乃ゆ来ゆる
ぞとに。郭ゆや字給へるゆ四てんうゆ。ぬのぐーれ大細言を
うゆいぬるゆぬ男いえ字ひいぞと着らきゆう。婦川四大臣に岩
金うそ字てひひーゆうんと作こるきてうるゆと。見い雑ゆーぬな
らぬ分むつうーゆど宣わいれうゆとべてとのことぞ女にゆうれぬ

ゆうにおつぞ云ゆーとぞ。淫去ち菊実白屋いおさゆーて。安来つ
院のゆく教ゆ来ーせさ男作ひるる友よれ行ゆどのーれぞとゆ人の
作ゆきるるとゆゆ。淫ち大臣屋おゆやーれ下女のえをるゆて
きゆうーゆ。ぬうーひせるるとて作ゆきるれ女のゆれせなりせで。
衣紋も冠をいうふもわきゆ。引けるうゆ人も作ゆーぬゆ人ゆ紛る
ぬ女いうぐういうぐれわぞとゆとゆふゆ女の性ゆ皆ひぐゆう人我のおふ
ゆくとんうく甚ーくわの理ゆ紙ゆうぞゆすぐ作ゆーひの方にゆもゆゆ
くううゆ作をゆくゆふゆるーゆーぬゆをも四ゆいゆぞ来ゆ
うとゆれぞ人淫ゆーれゆゆこゆどぐうふゆ出ゆくゆうたるうゆ
ゆぐきるゆゆ男のちゆふもゆうるうとゆ人ゆ甚ゆ作ゆうあう
るゆとゆうぞ。逆ゆーぞーてゆきゆれりゆいゆ女ゆうゆそゆふゆ淫て
能ゆうれんゆゆいんうゆべーゆ。それぞ作ゆうゆ女のゆうづーゆーんゆそー
喫女ゆーぐぞきゆもゆうゆくすゆ国ゆうゆんゆで遂ゆとゆるーぞゆーて

ゆきに法華経をよんでさうゆ也

(百九) 丹後国おしむ人の事 昔こゝに志ある人のこゝあり。一族おしむ人をとめ人とゆとされど高人乃一族おしむ人切なりせろゆえ
えどとい法花経をたゝこびてゆきまゝれど命を終るまちまれり
いつゝゆされど乃人ゆとゝ日月をおしむ屋うゝどゝ今の一念む
ゆくゝるゆ紙ゆ一しべ。ゆ人ゆ来りて我命ゆとうゆうゆど
うゝゆうゝべゝとつげゝゝせさうゝんゆうゝ乃ゆ乃ゆとた
のゝゆ乃ゆとうゝとゆまん。我らゆいけるうゝの日乃ゆどを忘せうにて
なうゝん。一日の内よりとんゆゝさ便利。睡眠。云語乃ゆ歩ゆむゆをえど
しゝておりゝゝの時と先をゆまゝれいとゆゝくゝゝゆうちに。ゆ益
のゆ乃なゝ。ゆ益乃ゆをいい。ゆ益のゆと思ゝしゝて。ゆとうゝと
乃ゆゝゝゝゆ。日を消ゝ月乃ゆうゝ一生をおゝるゆ。ゆ益ゆゝゝゆきい

うんい法花の経ゆ乃ゆゝゝたゝん。ゆ乃に因云乃ゆゝいと親せゝゝゝ。
恵ゝを白ゝ芝の文をゆゝゝさげうゝ乃ゆゝゝゝゆゝゝゆゝゝゝ。ゆ乃ゆゝゝ
ゝ光法花のゝゝゆゝゝゝ

ぞまけ〜どとうつぶ紙なりぶづまきのようとくまけぬべきとあん
じてそを紙つうどーて一めかたおそくまく〜紙をふ付べーと
いつぶ紙おれるそ〜ゆをおさめまとたもうん乃もつ者おうり

(百二) 囲碁双六を好でわ〜芸人ぶ座を逆するまきれる者の
とそぶふとある者乃しる耳にとぶ聞ゆるとぶ〜ゆ

(百三) 的日いを出おりしく〜べ〜とこうん人よ心をづうふをとぶう
んうぞとぶ人いひうけてんや儀の大事ともいとうをかふをげくと
もあう人ぶ他の事入ぶ人の熱衣をもとぶとんぶとそぶやぶ
と指う人もう〜されぶもやうく〜けぶ病ふもまつれいうん
やせとものぶきてこうん人ぶ芸ふをるじめるべ〜ぶ乃儀式ぶ
きのううさうぶこうぬ世俗のりぶ〜ぶとうう
ぶこせぶ死も多分を若く仏の勝りるく〜生ぶ雑るれ小者ぶ
さ人らきてしかく〜芸ぶん日ぶきを乃をく〜芸ぶとそに蹉跎ぶ

きう播磨と敵下をぶき時なりぶ伝をもあり礼義をも芸
ひぶ紙えぶうん人ぶ和ぶるひたいぶうぶ〜播ふ〜ぶ芸ぶ
るたふる〜油じぶしるたぶいをきじ

(百四) 二十ふもあうあう人の色めぶるのぶおのづう恐てあう
んいうぶせんぶとに歩出く男女乃ぶ人れうぶともいひたうふ
てそみげなく〜えぶる〜けをぶ大うぶ人ぶうう紙人にきじりて無あう
にてぶせの芸ふ人と色ぶてなをさうあふいをるぶ老
ふもえんとこの客人ぶ食意せんとうをめるる

(百五) 今出川の大炊屋源義ぶおう〜りかにあうを川のにううあう
のなぶきてる而ぶてさぶ五九に牛をあふさうれぶあぶ紙のふまん
板まぶでぶとのうりる紙ふる義れ車乃ちうにひひるぶ帯あふの
うう〜りるぶ而ふて出牛をぶあう人ぶうとひうりれぶ大炊屋ぶけ

ちきゝ〳〵ぶておのゝき車ゆうんゆさぶ丸よゆさうてえゝ
帝ゆこの男ぶとそれ車にひとあてらきみそうぴる名のさい
至丸ゆ左参度の男料乃れ牛飼ぞうぴうづまさ度みゆりる
女房の名れ人ゆひざくちぴ人ゆたとづちぴ人ゆまつぴ人ゆおとと
とそ付らきろう

(夏)富川京とゆ赤ゆそ付ろ〳〵おゆくあつまうて丸ふの金仲
とゆけるにぶうゆ人ゆるゆろ〳〵のゆ〳〵ぴ中にゆろと〳〵場とゆゆろ
やおゆ〳〵きゆとゆ弱ゆれぶを中ゆうえをゆ〳〵ぴくのゆあゆを
ゆそとゆゆきぶゆ〳〵梵字とゆ者ゆうぶのきゆ師ゆぶ〳〵とゆ
人ゆ京ゆそゆろそゆとゆゆろゆふゆろされゆろとれゆゆ〳〵うぶを人
にゆひきゆて帽ゆさぶゆとゆろひてぶゆ〳〵ゆとゆぴゆろと
ゆ〳〵ゆも弱ゆとゆ〳〵ゆろゆゆゆゆりゆぶゆゆにてゆらゆん〳〵ゆ
ぶ乃場ゆけぶ〳〵ゆるゆ〳〵ゆおゆの川京人ゆうゆんゆかゆ〳〵ゆさゆ

ざ〜たちぬづ〜ともうつぎのはなのおもしろきをみてよめる

年のさかりすぎがたになりぬべ〜といひしをこの川をみてぞおもひいでにける

むかしをとこ東の方へいきけり。なほ行くかぎりとおもふ心のつきていにけるとか。

武蔵の国と下総の国との境にいと大きなる川あり。その川のほとりに群れ居て思ひやれば限りなく遠くきてもかなしかりけり。さるほどに日も暮れぬとて、その川のほとりに下りゐて、思ひやるに、かぎりなく遠くきにけるかなとわびあへるに、白き鳥の、はしと足とあかきの、鴨のほどにて、水の上にあそびつ〜魚を食ふ。京にはかかる鳥はなしとなん言ひける。

（五八）

むかしをとこ、ねんごろにもあらぬ女のもとにつかはしける

あやめかりけるをりにつかはしける

あやめ草あらぬ方にもあらねばかりそめにのみ人のとはまし

（五九）

寺院の号さらぬ所にて、人の、

もとにとめどもとめどもかひのなきにぞ泣くなる

しゐてをしへてとはせけり。

もめどもとめぬものとはなしとつねにいふなる。されどもなほ人のこころ。

（六〇）

むかしをとこ、ねんごろにいかでと思ふ女、二人ありけり。

（六一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（六十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（七十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（八十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（九十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百二十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百三十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百四十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百五十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百六十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百七十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百八十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（百九十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百二十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百三十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百四十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百五十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百六十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百七十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百八十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（二百九十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百二十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百三十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百四十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百五十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百六十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百七十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百八十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（三百九十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百二十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百三十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百四十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百五十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百六十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百七十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百八十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（四百九十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百二十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百三十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百四十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百五十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百六十九）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十一）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十二）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十三）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十四）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十五）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十六）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十七）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十八）

むかしをとこ、二人の女をかたらひてよみける

（五百七十九）

むかしをとこ

ひとりてかとわなりそきもうゆるてれ多寄のゝ作ゝひ巽おのき
ら笑うゝせまでなるゝ紀人のおゝ出ることゝ作ゝざる紀ゝい
ゝ知もゝなど切て拵作わなるゝもきゝゆうのわも世のまに
ゆきゝよさうゆまでも入ゝうきゝなにてて作き

(百廿二) 唐のわい業乃かいゆくゝも幸のくまゝ書ゝもゝひ巽ゝ多
ひゝまゝうめきゝ書もゝしてゝ私のきやゝうゝぬゝよゝ云用
のわゝものゝえゝつゝてゝあせゝくゝはゝしゝてゝるゝと熟ゝ考ゝ紀わと寶ゝとせゝど
ゝもゝゝ拵ゝゝ紀寶ゝたゝうゝとゝまゝゝどゝゝもゝゝゝゝゝゝゝ作ゝゝとゝゝゝ

(百廿三) ゝゝゝゝゝゝゝ

あくまに紙作よまし給ふ道云の乃者居色とおりくとつくべし。
今の世よい色とりて世紙おさしるゆ屋うてく悪如ふにてう。
食いとぐれまた狭の蓋てれよちらざるぶでく

(五十四) 無益の乃紙をして附とうとて悪如人も作ゆとる人
たいつべく。国乃くあ者れて乃ふあふしるゆをひとくてゆとべき事
多く。そのまうのいとあいくだくうどてべく人の身にゆしるゆ
とひどくそいくるむ和歌一は食わ才二にくるわ才三ふ居あん。
人乃の大じけ三ふいるどで飢ど多くうど国面よおくさんどくく。
諸ふいとたのくひとと個人皆病色病におくされぬまでを熱
熱ぐくく医療をうとくるべうど茅紙人てにのてゆくあえざると
まづくとひにうけざるとあうとんひにうかをうあいとなむ
とおごうとゆとのゆ候紙うゆ非の人くうどとせん

(五十五) 是法法師い浄土ふにて和どといへた学道とくそどゆくる明

善念仏してゆとくうふ世紙うとあれいとあくまや。

(五十六) 人ふをくまて三十九日の仏ゆにわる雪を信じ待ふゆ法
いくじくて皆人泪とかどくうう師ゆくて後臨終れ人たいう
くうを殺ようふたくとく完待つくとんじわくうゆ海ゆる。
あるゆのいとく仏の先ひあまを経唐の物よ仏くうんうへとひと
ゆくにおゆまもあておくうくうくうる等師のゆあゆゆ五
百紀人ふ酒をくむくとそどのまきづさで人ふちいきんや
するい剣りて人をくうんとくるにふくるゆう二方よ双付くる
和なまいりくる附ゆづ我くらとくるゆ人とどえくくぬう。
おのまえんをひてゆくふどくうべ人いくもめくどとり紀剣そ切んく
けかうゆいとおくうゆくり紀

(五十七) 相変乃ゆけ抜て海ゆ
ど。立くうまつけく勝乃くゆ時のいくれるとくるべく真附紙

ものを紙物爽といふなるべしあめをようとゝもおかり

(夏八) 汲て益なき事いはゝくよく紀人おて大將もうさだやと

(夏九) 雅房大納言ゆかり〜おくよく紀人ぞ今わさ海〜紀の紙ん行う

ゑ〜けるに院のをなるなる人ぞ今わさ海〜紀の紙ん行う

つとゝゝさまとれぬ仏のゆぞとゝせ給ひるに雅房公爲ひ

んとそゝさまる大の豆とゝろ行うけるを中垣のみようる

見付つとゝゝさまとかようとゝ海〜くゝふて笑て日比れ出

色もたがひ昇をもたゆいざうけるさざうの人爲をとりてれ

〜ろるゝゝいつどなまどだの豆に紙ゆさうゆう爲でゝ不仮

なまだゆるゆ紙さう色給ひ〜ふくませたまひる爲の花

ふいとたうとたるゆうゆ大〜ういけるおとゝろ〜ふゝめてゝう

めてあとびさにのまん人ゝ畜生殘害乃者ぐひう乃者獸

ちいされ出ますでも紙とあてゝ忍れとゝんるふゝとおりひ親と

なつうとふう物とゝもゆゝひう欲おく身を忘〜。

命紙おゝめかゆゆひとゝ人ゝ愚痴ゆゆよゝ人ゝうゆてゝゆ

ゝ〜ゝまにゝるゝとあゝゝ命紙ゝうゝんゆひゝでゝうゝほゝう

さゝうんとゝで一切の西情とゝんてゝびひのゝふゆゝうんゝ人倫よゆゝび

(夏一〇) 顔回ゝおゝゝろゝゝ人ゝ労とゝゝどゝゝとゝゝゝでゝ人をゝるゝめ

物とゝ人ゝるゝゆゝゆゝ紀民のゝゝろゝゝゝもうゝゝゝゝゝゝゝゝ

なゝるゝ紙ゝゝゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人ゝまゝゝゝゝ孫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

病をとゝめ〜ゝとのゝて汗をとりもしるふにたるゝなれるゆ
あまとゞも〜てんそでおそるゝてとのまゞ〜ゝど汗をかゞとゞ〜ゝの
おうぞゝゆうとつゝてをたるべし〜凌雲の額をうゝて白沢の人をゆ
ゆ〜ゝため〜ゆえよゝ〜ど

(五十二) 和にのゝそゝどおのまゝてまげて人ゆおゝゞひゝゞ身をほひし
て人をさえかするにおうどよゝづのゆそびゆも腸負とこのむ人ゝ。
ゆちて無ゆゝんゝあなゝおのまゝゝ藝乃まゝゝるゆとゝゝゞ。
けるまゞまけてけゝゝゝくおがゆべゝゝゝゝゝれゝゝゞまけて人を
ようゝゞめんとゝゝゞゝにゆそびの無ゆゝるべし〜ゆゝいなく
ゝゝせゝゝゝゞんとゝゞゝゝんゆ徳ゝそむゝゝゝ。ゆゝまゞ紀中にたい
ゆゝゝゝ人をゝゝゝゆゞむゝて。おのまゞ智乃ゆゝゝるて紙
無ゝゝ。紀ゝ礼よゆゝゞゝれゞゝゆ無嘉ゝゝゝおゝゝてがゞ
きゝゝゝゝとむゝゝゞゝくゝゝひゝゝ。紀ゝゝゆゆゝゝそひゝゝこのむ美也

人ゆ勝ゝんゆゝゝゝゝ学問して其智と人ゝゆゝゝんゝゝゝゝ。
乃紀ゆゆゆゞゝとなゝゞゞ若にゆゝゝゝゝゞゞゝゝふゆゝゝゝゞゞゝゝゞ
ゝゝゝゝゝをゝゝるゞきゆゆなゝゝ大成職をも辞し利をもゝるゝ。
ゆゞ学問のゝゝゝゝゆゝ

(五十三) ゆゝゝゝゝゝゝゝゝの人紙をおゝて礼ゝゝ。老ゝゝゝゆゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
礼ゝゝゝどのゞゆゝゝゝゝゝゝておゝゞゞる時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞゝし。ゆゝゝゝゞゝゝんゝゝのゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

嘉

夜ノおとゝいのんゞ〜れいまゝ〜たりゝたゝてゆをたゝて湯を
をうゝゞさゆゝおゝ孔ゝもゝ首〜ゝゆゝ寝屋のまつゝし或ゝ面
枕つゝのゝなりゝまゝうゝのゝわんゝふ首よれ寝ゝりゝるゝゝふゝしを
なりゝゝ又伊勢ゝ面ゝりゝた祇宮ノ出方をれ沉よせゝ勢給ゝうゝゝゞ
とゝゝりゝゝゝゞゞた祇宮の遥ゝゝてゝうゝをにむゝゝせゝゝ面ゝふゝゝゞ

嘉

高倉の院法花堂ノ三昧僧。ゝふゞ〜の禅師とゝやゝゝりゝ。
ゝる時ゝゞゝゝとゝりてゝうゝゝとゝたゝゞゞとゝんゝて我ゝゝちのゝんゝふゝてゝゝさ
ゝゝ〜ゝゝゝゝとゝゝゝりゝたゝうゝゝゝおゝゝゝゝ

ちうんみくけきたちくびの長なるともちくどの藝乃たくみたともちくどの分の数のくぬともちくどの老のるともちくどの病のおりとともちくどおこの乃のいてくざるともちくどの分乃うんみ非とちくみてかのそくつをちくどくでくのちいくぐうたくるの家分ののちくぬふいあくみど。をくどさ方乃みけきくちくぬふ仰くちくでいくちくの代あくくあくうひとうくせくとにいあくどつこうたちくどのんぞ芸とちくことこれのあくざるのどくて人よ楽せくきどして。所よまくいるくそくのうつくちえふくんとくきよして出つくこ智みして大文に油くいう不幾の芸とちて思能の産ようくなう。名のうくらとくくたくさうのるくよるらくびいくんやおよくざるのる代産をのかいぬるのをうきくこくくざるくとをまちくんよおくきくんふ媚るくんのあくこるの私ふあくどくむくが

るくんふひうきくてくづうくのをくをくづうくむるかうくひくさかるのの

やまざるくん命とあるくたるのくん今交に来きるくとたくしくふちくざれくこ

（夏六）資季大納言入乃とうくくこくさくるくん具氏宰相中将にあくひ

てくこあくしのくとくえきくんかくれるのくん伊くでくかくくもくくるくんくとくされるくとくさくあくくびあく

いくれるくこくびくくもくうくちくいくくん伊くくんくとくされるくとくさくあくくびあく

といくれくくえるくくくしくくさるのくいくくうくくもくくのくびくちくん伊くくくくくん称くくくづる

ゆくくくでくもくかくしくくん伊くくとくうくれくくくそくくろくるくれ中にくくびくつくるくくさるのくんくくそ

とくひくくくそくくまくつくくあくくとくくくれくるくうくくゆくくくく

二ノ十

くれんどうとりのいらぬ仏をみうゐるこんぶくこんとりさんれけるに。
大納言入道殿つまるまてに。色いそぐろのきぬぶつをみるたること
といまれるとりとうふろうゐるこどそぐろてとこづ。
きうんとさこめりつとりさまきれぐ大納言入道殿けるなて西深いか
めくせきをうろふとこそ

(嘉七) ふとこめつもげ故法皇の出家さつくひて。伝れのまつろる
に。今まつろゐるこどのいろくこど。文字も功能もそなつ。下さまて。
そこにとゐるこぐ菊にこんじあいせきゐれくぴろもりあや
まうゐるこどとけるぴしをこ六条故内府まつろのひく有房つい
でにわなくいゐるこんこそ。ぎづもやとくりこいづきの扁ふう
ゐるこんとこれこうろるに。去扁ふいとりこうれぐの行とこぐに
別ふこう。今いさづうにてひくゆくゐ西方くとりさんろるにどこと
に於て死出ふこう

早稲田大学図書館
011788022486